

## 29年目の長良川河口堰

名古屋市立女子短大で教えていた1980年代半ばごろから、巨大な公共事業・長良川河口堰に関心があった。岐阜大で開催された研究会に参加し、三重県長島町で開かれたシンポジウムなどに参加した。短大のゼミ生らと現地を調査したこともある。

朝日新聞夕刊「現場へ！」で11月20日から4回にわたり表題が連載された。担当は伊藤智章編集委員である。伊藤さんは環境や災害、そして戦争被害者など多くの記事を書いている。じつは伊藤さんとは顔馴染みである。愛知県の開発と環境問題などで意見交換したことも。また伊藤さんが震災後、岩手県の宮古支局長時代に田老地区を案内してもらったことがある。伊藤さんは1994年に長良川の取材を始めたという。連載にはよく知っている人も登場していて、なんだか懐かしい思いで読んだ。連載から長良川と河口堰の今を抜粋して紹介しよう（敬称略）。

長良川のアユの漁獲量はピークの1990年前後の4分の1に減った。水資源機構は「全国的に減少しており、河口堰を遡上するアユの数は順調」と説明する。病気や河川改修が影響している可能性もある。ただ、このままでは2015年に世界農業遺産に選ばれた「清流長良川」の維持は危うい。漁期に友釣りの対象となる大型アユは、いまや8割が放流ものだ

鳥羽磯部漁協組合長の永富洋一は語気を強める。「長良川河口堰や徳山ダムで、大水がどんどん流れないんだよ」伊勢湾に注ぐ木曾、長良、揖斐の木曾三川の淡水と栄養分が、外洋からの海水と混じり、豊かな漁場を作った。ところが95年には長良川河口堰、2008年には揖斐川上流に徳山ダムができた。それで伊勢湾が変わったんじゃないか、と永富は言う。

市民団体「長良川市民学習会」の事務局長、武藤仁は名古屋市上下水道局の元職員だ。1988年、河口堰の反対運動が再燃したときは水道労組の組合員。労組幹部に、組織として運動に参加するよう求めた。水利用のあてがないのに市が河口堰事業に加わり続けられれば、料金値上げなどで市民にしわ寄せが行き、自分たちの労働条件にも響くと考えた。武藤とは何回か話すこともあった。もう一人、最後の回に登場した長良川河口堰の建設反対運動のリーダーだったアウトドアライター、天野礼子にも注目した。今は島根県に住んでいるようで、「もう官僚と戦争するのは嫌。一緒にやりたい」という発言も。私が事務局長をつとめた1999年の日本環境会議名古屋大会の準備で、天野さんから厳しい指摘を受けたことが忘れられない。でも大会前日の現地視察では、原田正純先生や宇井純先生らを河口堰に案内してくれた。

長良川河口堰建設所長として、天野と対峙した宮本博司は、「自分たちが一番分かっている、というのは間違いだった」とも。異常気象が続き、国交省も流域治水を言い出している。ダムだけに頼れない、ともいう。今こそ、謙虚で柔軟な知恵が必要だ。

(2023年11月28日)